平成26年(2014)
阿づまの光
12月号・Decembro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「伯光苑大本歌祭」
[伯光苑土＋伯光苑梅・紅水晶（ブラジル産）釉]

題字出口直日

通巻第549号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

悟りても悟りつくせぬかくり世の
神の御業（みわざ）の奇しくもあるかな

出口王仁三郎聖師

雄大で壮大な明るい話題

祭務課主事 井畑（いばた） 太（ひろし）

打ち上げから7年後の、平成22年（2010）6月、小惑星探査機「はやぶさ」が60億キロにおよぶ宇宙の旅を終えて地球に帰還しました。このニュースで日本中が明るくなり湧きました。その後、この雄大で壮大な計画成功の物語は3本もの映画になったことが記憶に新しいところです。

地球から太陽までの距離は、約1億5千万キロと言われています。その40倍という気の遠くなるような距離の大宇宙空間を、7年かけて飛行してきたという、雄大で壮大な話題は、聞く人の気持ちを自ずと大きく明るくしてくれます。

ご承知のとおり、月以外の天体に着陸した探査機が帰還したのは、この「はやぶさ」が世界で初めてのことです。宇宙空間に浮いている小さな天体に着陸して、物質のサンプルを採取して帰還させるのは非常に高度な技術だと思います。

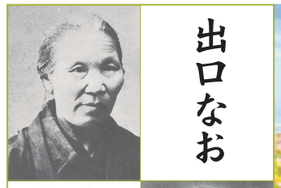
しかし、もう一方から思考を巡らせてみると、人間が計算して目的の惑星にたどりつけるということは、理論的に秩序を保っているということ、計算どおりで狂いのないその位置にあるということになります。この方がよほどすごいことではないかと思うのです。

聖師さまが「万有の運化の毫差（ごうさ）なきを視て、真神の力を思考すべし」。また、尊師さまが「空にかがやく星の世界を見よ。その星の群れのまた彼方の星の群れを思えよ。そして、この大宇宙に、これだけ整然たる秩序をつけたものの力を悟れよ」『信仰覚書』第二巻）とお示しになられているように、まさしく言わんとするところだと思います。

来る11月30日には、同じ小惑星探査機「はやぶさ2」が打ち上げられる予定とのこと。地球への帰還予定は6年後の平成32年だそうです。また雄大で壮大な明るいニュースが聞けることを思うと、今から楽しみです。

出口王仁三郎が示した〝あの世〟に学ぶ

～霊界と魂の関係～



出口なお
王仁三郎の世界を語る
大本公開講座

講師 成尾（なるお） 陽（あきら）
（メディア愛善宣教課長）

目に見えない存在

私たちの周りには、物質的な扱いのできるものと、そうでないものとがあり、存在していても、普段は肉眼で見ることができないものがたくさんあります。

たとえば、自分の気持ちや感情をストレートに他人に見せることはできません。それでも、人に〝心〟が存在することは、誰もが認めるところです。

同じように、死後の世界も普通の人が見ることはできませんが、その存在を感じ、信じている人はたくさんいます。この目に見えず、物質的な扱いのできないものを一般的に「霊」と言い、死後の世界を「霊界」といいます。

神道では祓（はら）いの儀式を大切にしていますが、これは目に見えないものを祓い清めることです。神や霊の存在を信じなければ、祓いの必要はないはずですが、無神論者でも、いざ自分の家を建てるとなると地鎮祭をする人はあるようです。また、土地の因縁で体調が悪くなったのではと不安になって、お祓いを頼む人もあります。

このように、「神」「仏」といわなくても、目に見えない物に対する〝畏れ〟や〝敬い〟というものは、日本人の多くが持っている感性ではないでしょうか。

霊界は言心行一致の世界

大本の教典に、出口王仁三郎聖師が口述筆記した『霊界物語』があります。1冊が平均約350ページで、全部で83冊という膨大な書物で、大本教義の根幹が示されています。

タイトルの「霊界」は〝霊妙（たま）なる世界〟という意味で、〝あの世〟（死後の世界）のことだけでなく、この世（現界）のことを含む広義的な意味があります。そのため『霊界物語』には、死後の世界だけでなく、現界や未来の預言や人の生き方など、さまざまなことが幅広く教示されています。

ふだんの生活の中で、私たちは、外見は喜んでいるように装っていても、心の中ではその逆の時もあります。現界では、気持ちや感情をある程度隠すことができます。

しかし、霊界に行くと〝言・心・行〟が一致してしまうので、想念がそのまま表情や言葉に表れてきます。これが、霊界と現界とが最も違う特徴です。

この世では、心と行いを常に同じくすることは難しいことですが、生きている間に意識して一致させる努力をしていくことが大切で、それが、霊界へ旅立つ上での大きな糧となります。

死後の世界を正しく知ることによって、現界での生き方、人生の目的に対する考え方が変わってくるのです

死後五十日間の重要性

死後の世界（霊界）は、「神界」「幽界」「中有界」の三界に大別され、死後、最初に霊魂（精霊ともいう）が行くところが「中有界」です。

人は死を迎えると同時に「死有」から「中有」の状態になります。死後49日間を「中有」といい、50日目から「生有」と言います。「中有界」にいる約50日の間に、霊界での親や兄弟が定まり、その霊魂の行き先が「天国」なのか「地獄」なのかが決まるとされています。

その意味において、古来日本人は、この50日間を大切にしてきました。大本でも、50日間の霊祭と、以降節目の供養やまつりをとても大切にしています。

『そうして中有の四十九日間は幽界で迷っておるから、この間に近親者が十分の追善供養をしてやらねばならぬ。またこれが親子兄弟の務めである。この中有にある間の追善供養は、生有に多大の関係がある』（『霊界物語』第1巻）

このお示しのように、子孫が現界で追善供養をすることは、必要不可欠であり、精霊にとって大きな力となるのです。

また精霊は、「中有界」で、「外分の状態」「内分の状態」「準備の状態」という段階を経ます。

「外分の状態」というのは、生前のさまざまな想念がまだ際立っていて、本性が覆い隠せる状態です。ところが、次第に外分が剥はがれて、本心だけの想念が表れてきす。それが「内分の状態」です。そして、「内分の状態」から、天国に行くための準備をする「準備の状態」に移るのです。

三途（しょうず）の川

世の中には、「霊界」の入口に行って戻ってきた、いわゆる「臨死体験」をした方が少なからずいます。「トンネルのような所を進んだ」とか、「お花畑を歩いていた」などよく聞きます。そして、一番多いのが「三途の川を見た」という話です。『霊界物語』では、この「三途の川」の様子がとても詳しく記されています。

『三途の河は神界と　現界または幽界へ　諸人（もろびと）たちの霊魂の　行方の定まる裁断所（さばきどこ）　八洲（やす）の河原とヨルダンの　河とも唱（とな）ふ神聖場』（『霊界物語』第14巻跋文）

つまり現実の世界と〝あの世〟を隔てる場所が「三途の川」なのです。

生前に悪行をなした霊魂が「三途の川」へ行くと、鬼の形相をした川守の老婆に衣服を剥ぎ取られ、地獄へ落とされます。反対に善の霊魂が行くと、美しい天人が優しい言葉で話し掛け、錦の衣服に着替えさせ、天国へ行く〝証〟を授けてくれると表現されています。

しかし、実際には「三途の川」に鬼の形相の老婆や、優しい言葉を使う天女がいるのではなく、亡くなった人の霊魂が善であれば天女と見え、悪であれば鬼となって映るのです。これは、「中有界」における霊魂が、次第に「内分の状態」となるからで、天国に行くも、地獄に落ちるも、神が定めるのではなく、自分の想念しだいなのです。

『ことさらに神は地獄をつくらねど己（おの）が造りておのが行くなり』

と聖師は教えています。

天国の様子

天国は低い方から大きく「第三天国」、「第二天国」、「第一天国」と3つに区分されています。さらにその3つの段階が、それぞれ60段階ずつに分かれています。さらにその上に、最も高い「最奥天国」があり、そこには神さまがおられます。このあわせて181段によって、天国は構成されています。

その各段階には、それぞれ無数の団体があり、天国へ行った精霊は、いずれかの団体に所属することになります。同じ想念と価値観の精霊が集まり、気兼ねのない、とても住みやすい環境とされています。

また、天国では男性は30歳、女性が20歳頃の年齢相応の状態になると示されています。天人は内分に意志と智性をもっていますが、男性の場合は智性が主であり、女性の場合は意志が主となります。天男天女がお互いに欠けている面をおぎないあって、一人としての人格が成り立っているので、天国では夫婦をもって一人とされています。

天国では同じレベルの霊魂が集まり、居心地が良いため、現界のような苦悩がありません。そのため、揉まれることが少なく、霊界で魂を向上させるのはなかなか難しいのです。ですから、人は現界（この世）で、いろいろな壁を越えながら改心し、〝み魂磨き〟に励む方が、霊魂の向上につながると教えられています。

人の誕生

現界では、肉体をもつ夫婦により、生命が誕生し得られているように思われていますが、その生命の本当の親は、霊界の天男天女の夫婦であると示されています。天人夫婦のいとなみから、天人の〝霊（たま）の子（こ）〟が生まれ、現界人の母体に宿り、人の子として生まれてくるのです。

『霊界物語』には、さらに「降誕」・「生誕」・「再生」・「転生」という、4種の生まれ方があると説かれています。「降誕」とは、神が大きな使命を持って生まれて来ること、「生誕」は、天国天人が下ってくること、「転生」は、動物霊から人間に魂が向上し生まれかわったり、逆に動物に堕ちてしまう場合のことです。

そして、この世の多くの人が、「再生」だと言われています。人は死んで霊界へ行き、また再生して現界に戻って（誕生）きます。生まれ変わると、前世のことは基本的に覚えていませんが、死後、霊界に復活すると、その記憶もまた甦ってくるそうです。

〝あの世〟を知って生きる

煎じ詰めれば、人の死とは、精霊が霊界に復活することを意味し、現界は精霊の修行場であるということです。

大本では〝修業〟ではなく〝修行〟という字を使います〝修行〟とは読んで字のごとく〝行いを修める〟ことです。つまり、日常生活そのものが修行なのです。

辛く苦しい思いをするだけでなく、何事に対しても、前向きに楽しく生きていくことも修行です。苦しい思いのまま亡くなると、その想念を霊界へ持って行ってしまうことになるからです。

〝あの世〟、〝霊界〟のことをよくよく学んでいくと〝今を生きる〟ということが、いかに大切なことかが分かってきます。

本来、人はまじめに働き、世のため、人のために尽くすことが本当の喜びのはずなのです。それに向かって陰徳を積み、困難に遭（あ）っても、清く正しい言葉を使うように心がけ、明るく素直に前向きに、感謝の心をもって生きることが何より大切なのです。

掲載文は、平成26年8月20日に航空会館（港区新橋）で開催した「大本公開講座」講演録の要旨です。

教本2級認定講習会

10月25・26日の両日、大本東京本部を会場に「教本2級認定講習会」が開催され、17人が参加した。

参加者は「実践リーダー教本『中級編』」をテキストに、第1章「宗教について」から、第8章「大本の使命」までを音読学習したほか、練習問題と対話実習に取り組んだ。最後に〝理解度チェック問題〟にのぞみ、研さんを深めた。

参加者からは「一般の方にどのようにお伝えすれば理解していただけるか、考えながら勉強しました（70歳代・男性）」などの感想が寄せられた。

東光苑秋季大祭

東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは11月9日、午前10時30分から、斎主・出口文営大本楽天社代表のもと執行され、340人が参拝した。

祭員は関東教区各主会の祭務部長等、少年少女祭員は、千葉主会の武山なおひさん、あおいさん姉妹。伶人は宮咩会関東支部、大本神論拝読は、渡辺敬治茨城主会次長、添釜は髙野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦本部長があいさつに立ち、「日ごろ、分所・支部に参拝されない方へ、神さまの光とみ教えを取り次がせていただくことが、まさに〝外へ広く、内へ深く〟の実践である。また、関東には神教宣布のさきがけ的なご用があり、大本公開講座・常設講座を積極的に受講して、研さんを深め、将来的には各機関の主催で大本公開講座を開催していただきたい」と結んだ。

最後に歌祭への献歌を呼びかけられた

凛とした謡いに魅了された

会場は清らかな音色に包まれた

次いで、出口文営大本楽天社代表が『伝統文化は甦る』と題して記念講演を行い、「伝統文化が凝縮された歌祭を世界の人々に伝えることが、〝みろくの世〟へと繋がる広く大きなひな型である。自然と人間が一体化した時に、真の世界平和が到来するだろう」と述べた。

その後、宮咩会関東支部による八雲琴『東の名残』、茨城主会による連吟『鶴亀』、仕舞『高砂』が奉納された。

葬祭研修会

11月15日、大本東京本部を会場に、「東光苑葬祭研修会」が開催され、38人が参加した。同研修会は昨年に続き今回が2回目で、講座を中心に行われた。内容は調度品などの飾り付け、喪家の心得、招魂・発葬・家祭式、毎十日祭についての講話、および葬儀業者とのやり取りなどで、現場での実用的なことを学んだ。

基本的なことから習得した

大本公開講座

第141回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る2014』は、11月19日午後7時から、港区新橋の航空会館を会場に開催され、猪子恒東京宣教センター次長が「人は何のために生きるのか～万物に使命がある～」と題して講演した。参加者は31人（内、一般11人）。

講座では、すべての人・物には天からの使命が与えられていて、困難も仕合わせになるための修養の一つであると結んだ。参加者からは、「人は生きているから働く、そして向上すべきと学んだ（女性・一般）」等の声が寄せられた。

仕合わせの秘訣は「感謝」から

東光苑祭典・行事予定

平成26年12月

14日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（火）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（178年）

17日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 真理の「幸せに生きる主義」
～宇宙の呼吸・宇宙のリズム～
講師 浅田秋彦（大本本部長）

25日（木）午前10時30分執行
尊師毎年祭（23年）

平成27年1月

1日（祝・木）午前7時執行
新年祭

1日～3日（木～土）各日午前9時半
年賀

7日（水）午前10時30分
東光苑七草粥接待

11日（日）午後10時30分執行
東光苑月次祭・成人式式典

19日（月）午前10時30分執行
聖師毎年祭（67年）

21日（水）午後7時～8時30分
大本公開講座（航空会館・港区新橋）
講題 激動の中に見えてきた明るい未来
～日本と世界は今どこに向かっているのか～
講師 藤原直哉（株式会社あえるば会長・経済アナリスト）

※本年度の大本常設講座は12月22日（月）をもって、一時閉講し、来年度は1月14日（水）から開講します。